H20.7.24.(木)

（第三種郵便物認可）

患者の人生知り 病院で「みとり」

人生の最終章をよりよく生きてもらうために、医療は何ができるのかー。富山県砺波市の佐藤伸彦医師は「ナラティブ」（物語、語り）という理念を基に、高齢社会の難問に取り組んでいる。

■富山の医師が取り組み■

佐藤医師㊧は地域の小さな診療所で診療をしながら、ナラティブホームの開設を準備している　（富山県砺波市の太田診療所）

昔の写真見て語り 物語的に理解

多忙な医療現場、病気以外は患者の生活を知らないもどかしさ。そんな悩みの中で、佐藤医師は「終末期医療は医学だけで太刀打ちできない」と気付き、ナラティブの理念にたどり着いた。医師や看護師、介護士、家族が、高齢者の患者を「物語的に理解する」ことで、患者の生を共有しようとする試みだ。

その道具立ては、写真と語り。佐藤医師は約五年前から同市の療養型病院で、高齢者が入院する際、昔の写真を集めるよう家族に頼んでいる。アルバムを作ってもらい、病院スタッフも見る。

例えば、認知症で寝たきりだった田中さんのアルバムは「心象の絆（きずな）」と名付けられた。中には、現在のベッド上の弱々しい姿と女学校教師時代の若々しい姿の写真をレイアウトしたページも。

それを見た病院スタッフと家族は、「空気が劇的に変わった」という。

「人には豊かな物語がある。周囲の人たちがそれに気付き、信頼関係が深まった瞬間でした」と佐藤医師は振り返る。

「家族がアルバムを作る過程で物語が紡がれていく。写真を見ながらスタッフと語り、患者の生活史が共有されていく。

今夜は石窯パン！
タカキベーカリー

病院と患者、家族と患者の関係が再構築されていくことにつながります」

来年、となみ野農業協同組合（同市）が建設する高齢者向け住宅に、ナラティブを理念とする診療所を開く予定だ。さらに、仲間たちと新しい老人ホームの設立を構想している。

「かつては村の長老や僧侶がみとりをしていたが、現在はほとんどの人が病院で亡くなる。写真や語りだけでその人の人生が分かるというのはおごりですが、近づく努力はしたい。伝統を受け継ぎつつ、新しいみとりの文化をつくれれば」

愛唱歌の風景

合田 道人 ⑭

兎（うさぎ）のダンス

野口雨情・作詞
中山晋平・作曲

1

ソソラ　ソラ　ソラ　兎のダンス
タラッタ　ラッタ　ラッタ
ラッタ　ラッタ　ラッタ　ラ
脚で　蹴（け）り蹴り　ピョッコ　ピョッコ　踊る
耳に鉢巻（はちまき）　ラッタ　ラッタ　ラッタ　ラ

2

ソソラ　ソラ　ソラ　可愛（かわい）いダンス
タラッタ　ラッタ　ラッタ
ラッタ　ラッタ　ラッタ　ラ
とんで　跳ね跳ね　ピョッコ　ピョッコ　踊る
脚に赤靴　ラッタ　ラッタ　ラッタ　ラ

とてつもなくかわいい童謡である。おゆうぎ会で兎の耳をまねて子供が頭の上に手をのせて、♪ピョッコ　ピョッコ　踊る…姿がぱっと目の前に浮かんでくるではないか。

野口雨情の詞には「赤い靴」や「しゃぼん玉」など、その詞の後ろに潜む人の嘆きや悲しみが隠されている作品が多いが、これはどう見ても、兎が楽しく踊るさま以外浮かんでこない。子供が大好きな兎の動きをこんなにもかわいらしく、それもしっかり音が聞こえて来るように表現されている詞に感服である。

中山晋平の曲もリズミカルで、発表当時から児童舞踊家たちの振り付けもつき、子供たちのあどけなさを十二分に発揮させている。

楽しく踊る姿浮かぶ